

国際政治学

講義6

国際(政治)システムの構造

早稲田大学
政治経済学術院
栗崎周平

近代・現代の国際政治システム

1648年ウェストファリア条約:

1. 30年戦争(Thirty Years' War) の終結
2. 「国家」を欧州における正統な政治権威の形態と確認する
 - 神聖ローマ帝国や教皇の影響を排除
3. 国家主権を特徴付ける原則の確立
 - 主権国家体制としての近代国際システム

ウェストファリア条約という単一の講和条約はない。多様なアクターによる複数の講和会議。

国際政治のシステム(近代以前)

世界帝国システム



封建システム

- ローマ帝国崩壊から近代の誕生
- 多様な政治主体と統治形態
 - 貴族(荘園)、司教(教会)、都市(自由都市・ギルド)、皇帝(神聖ローマ帝国)、教皇(ローマ教会)
 - 政治的忠誠と義務(支配服従関係)が重複・重層的

近代主権国家システム

主権国家

対内的強制力
対外的自立

主権 = 政治支配のための排他的で絶対的な権威
国家 = 統治者(そして政治主体)の法的地位

1648年以前の欧州はシステムとして政治的に不安定

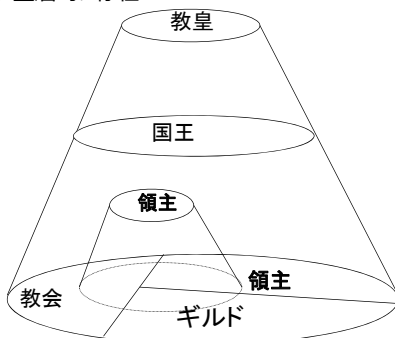
- ローマ帝国崩壊以降、封建的な境界に沿って政治主体・共同体は組織化
- 神聖ローマ帝国(カトリック)が中欧(現在のドイツ・オーストリアなど)を支配
 - しかし、皇帝はその構成員にする絶対的権威を欠く
- 領土・居住者に対して複数の政治権力が競合
- 例: 1555年、アウグスブルクの和議

神聖ローマ帝国内の諸領主が信仰の決定権を持つ
個人の信仰の自由は認めず。カルヴァン派も認めず

ルター派が認められる
領邦君主が決定する

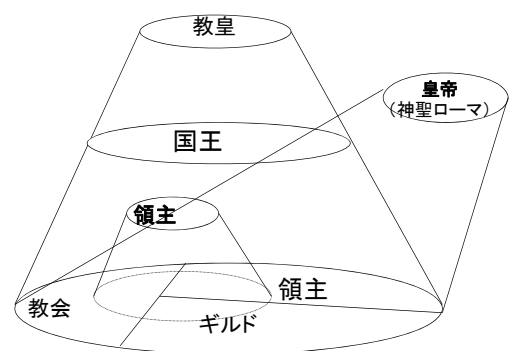
封建性での政治権力配置

政治的忠誠と政治的義務(支配服従関係)は領土によって規制されずに重層的に存在



封建性での政治権力配置

政治的忠誠と義務の重複と競合



宗教戦争: プロテスタントvsカトリック

神聖ローマ帝国内

覇権戦争: ハプスブルグvsブルボン

スウェーデンvs神聖ローマ帝国、デンマーク バルト海をめぐる勢力均衡を作り出すための戦争

政治戦争: ハプスブルグ(皇帝) vs 諸領邦、都市、教会、荘園

封建性での政治権力配置

政治的忠誠と義務の重複と競合 (出典: Wikipedia)



封建性での政治権力配置

政治的忠誠と義務の重複と競合 (出典: <http://fc09.deviantart.net>)



主権国家

主権の二面性

- 対外的主権と対内的主権

「ウェストファリア条」により確定 (とされる)

- 条約の諸原則は三十年戦争の原因ともなった封建制における政治諸問題への解決として提起される
- これら諸原則は現代においても不変
- ウェストファリアン・システム
- 思想的には、絶対主義時代の国家理論 (正当化の論理) として Jean Bodin や Thomas Hobbes によって確立された

主権国家

出典: global.britannica.com



対外的主権

原則 1: 独立・不介入

- 他国からいかなる干渉も制限も受けない
- 国連憲章: 政治的独立侵害の禁止・領土保全の義務

原則 2: 平等

- いかなる国も同一の権利を有する: 独立・自由
- 相互・互恵性の原則

本当に平等?

片務的契約ではなく双務的契約

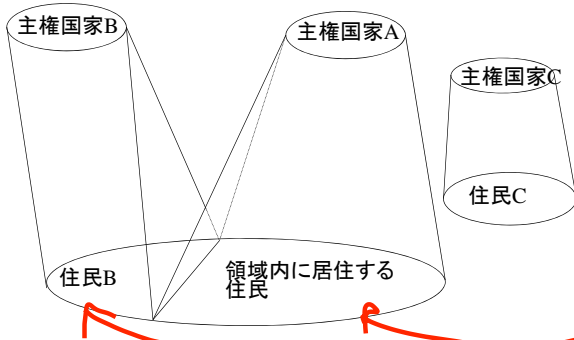
対外的主権

原則 3: 領土性

- ウェストファリア条約: 国境の画定・領土の分配
- 確定された領土内での主権を確認
- 領土内における統治権とその權威の最高性 (絶対性) を確立
- 1648年以前にはなかったもの

Westphalian Solution

領土に対し権威・政治契約の重複・競合なし



主権国家

出典: global.britannica.com



対内的主権

原則 4: 権威の最高性 (Supreme Authority)

- 主権の保有者は、領土内のいかなる権威よりも優越し、それが正当であると認知される
- ウェストファリアン・システムは、それ以前に存在した、統治・支配の重複・競合つまり、政治的忠誠と義務の重複・競合を排除し、唯一の権威システムへと再編成する
- これが封建制問題へのウェストファリアン解

対内的主権

原則 5: 暴力の独占

条約の束、慣習法

- 対外的: 主権者のみに交戦権を認める(国際法)
- 対内的: 暴力を正統に行行使する唯一の主体
 - 警察、軍隊
- 暴力だけでなく、他の強制力の行使
 - 法規範の決定(立法)、徴税、裁判(司法)、教育
- 生命・財産を保護する責任を享受する唯一の主体
 - 安全保障の唯一の提供者

その代わり

安全保障という公共財を提供するために暴力を行使する

テロリストは非国家主体、扱いは戦時法に乗っ取らなくて良いがプッシュ政権の主張

主権国家の国際政治への含意

対外的主権の含意

- 内政不干涉・国家の平等
- 理論的フィクション

中国のチベット、新疆ウイグル
内政干渉と内政不干涉。
PKOも内政干渉。
IMFはweighted votesなど
内政不干涉、国家の平等はあくまで理論

対内的主権の含意

- 主権者の上に主権者を置かない(至高性)
- 主権国家をまとめる上位の(世界)政府の欠如
- ホッブスが求めるような個人の自然権のレヴァイアサンへの一部譲渡のように、主権国家によるその主権の譲渡によって世界政府を樹立することはできない(主権の否定となるため)

問題を作り出す

主権国家の国際政治への含意

1. 国際システムにおけるコミットメント問題

- 中央政府の不在
- ⇒ 国家間合意の強制装置の欠如
- ⇒ 各国家が自発的に望まない限り、合意や規範の履行を強制することはできない
- 2. 国際システムにおいて武力行使が常に可能
 - 安全保障装置としての国家(存在理由) 生存
 - 各国家は、各々の目的達成のため武力行使を行うことができる(暴力の独占)

anarchy

主権国家の国際政治への含意

リアリズムの視点

3. 近代国際システム＝無政府状態（アナーキー）
 - ・ ホブズ：無政府状態は「自然状態」
 - － 「万人の万人に対する闘争」
 - － 共通の上位権威が存在しないため、秩序の維持を行う統治者が不在
 - － 自らの安全保障を図る責任 ⇒ 自助システム
 - ・ 国際システムにおける政治の基調は権力政治

主権国家の国際政治への含意

4. アナーキーとしての国際システムと安全保障への含意

安全保障のジレンマ

- － 無政府状態が軍事紛争のリスクを生む
- － Anarchy Encourages Fear of Military Conflict

Permissive Cause of War

軍事紛争があっても仕方ない

- － 無政府状態は軍事紛争の機会を与える
- － Anarchy Encourages Opportunities for Military Conflict

国際システムのパズル

国際システムに固有な問題はその構造的特性による

- ・ 中央政府の不在 ⇒ コミットメント問題
- ・ 主権による暴力の独占 ⇒ 武力行使が常に可能
- ・ 自助システム ⇒ 権力闘争
⇒ 安全保障のジレンマ

国際システムのパズル

- ・ 主権の原則はフィクション
- ・ なぜ現実と齟齬のある主権国家体制（近代国際システム）が維持されているのか？



By ウィルヘルム・ハイネ Wilhelm Heine
Perry's visit in 1854. Lithography. New York: E. Brown, Jr.
パブリック・ドメイン

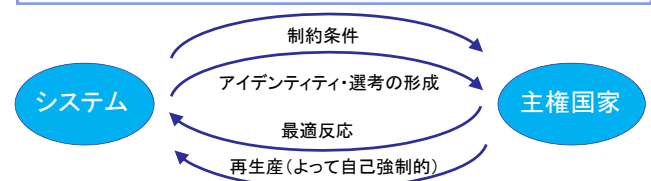
国際システムのパズル（短いバージョン）

Short Answer:

主権システムとその帰結としての自助システムの存在
均衡としての制度、制度としての主権・アナーキー

⇒ 間主観的な了解・期待

⇒ 「自助システム」は自己強制的なナッシュ均衡



アイデンティティに照らして選好が形成される

それに基づいて最適反応

パターン化、アイデンティティの形成

回帰的にアイデンティティ形成



新皇居於テ正殿憲法発布式之図
Illustration of the Issuing of the State Constitution in the State Chamber of the New
Imperial Palace, March 14, 1889
メトロポリタン美術館（ニューヨーク）

国際システムのパズル（長いバージョン）

国際システムの「自助システム（権力政治）」という特性は国際政治システム構造が、外生的に与える制約条件ではなく、国際政治「過程」が内生的に社会的に構築

どんなきっかけでも結局均衡でここに至る

1. アイデンティティ・選好の形成

「主権システムが存在する」と国家が信じる（間主観的な了解）

- 「他国も主権原則に従って行動する」と信じ期待する（共通知識）

game theoretic
common
knowledge

- 「自助」という集合的アイデンティティがなぜ生まれるのか？

自助が我々のアイデンティティだ！

→ ウェストファリア会議がpublic signalとして歴史的役割

- 「国家」という政体は安全保障という公共財を提供するという機能的な役割を歴史的にもつとの了解を「確認」したことを皆で確認

common knowledge
established

- 「自助」という集合的アイデンティティが、「生存」や「力」を追求するという「選好（目的関数）」を生む

間主観的

国際システムのパズル（長いバージョン）

2. アイデンティティが集合的に作る構造が与える制約条件

- 「自助」選好をもつアクターの集合が、勢力均衡という構造を作る
- 法制度としての阻文化がこのアイデンティティを助長：暴力の正統的な行使権を独占してきた

3. 最適反応（選好やアイデンティティに基づいた、行動の選択）

- 主権原則に基づく行動・実践が「正統legitimate」であり、「最適反応best reply」となる

- 他国が「自助システム・権力政治」として行動していると了解し、予測し、それにしたがって自らの行動を決める

最適反応は主権原則に基づく行動

→ 自国のみ一方的に逸脱する誘因が働かない（ナッシュ均衡）

4. 再生産（この過程の反復→行動の平衡化→制度として形成）

- 相互作用の中での接触により「自助」という集合的アイデンティティという間主観を再確認し、社会的に構築し維持

安全保障のジレンマ

自助システムとしての国際システム

- 各国は、自らの責任で自国の防衛を担う責任
- 各国は、防衛の手段を確保

対外脅威とそれに対する軍備増強の負のスパイラル

- 自国の安全保障の強化（防衛力向上）は、結果的にいずれの国の安全保障のレベルも逆に低下
- 相互不信・脅威認識に基づく恐怖がその原因

戦争の原因としての安全保障のジレンマ

- 相互の軍備増強競争のスパイラルが制御不能
- 先制攻撃への誘因 ⇒ 戦略的安定性の瓦解

Permissive Cause of War

ケネス・ウォルツの *Man, the State, and War*, 以来、国際システムの無政府状態が、戦争が繰り返し起こる根本的な原因として考えられてきた

- “Under anarchy, nothing stops sovereign states from using force if they wish.”
- “Each state in the system can judge its own grievances and ambitions, and can choose the means to achieve its political goals”
- その手段として軍事力の行使は除外されない
- なぜなら主権システムが軍事力の独占的・正統的行使を認めているため